

## 「エイサー見聞雑感」

流域管理調整官 池田 勉



エイサーの起こり



うるま市平敷屋青年会(東)のエイサー(伝統エイサー)



創作エイサー

事の本によれば、エイサーは、いわば日本本土の盆踊りにたとえることもできるであろうと言われ、お盆に盆踊りが行われるように、沖縄ではエイサーも旧盆にしか行われない行事である。

エイサーが旧暦のお盆、つまり精霊迎えから送りにつながる行事であれば、それが仏教から出てきたことは間違いないだろうと言われている。古老たちの話をうかがうと、エイサーは沖縄では「ニンブチャーウイ」、本土では(念仏踊り)のことだという。

ニンブチャーは念仏僧のことで、各家庭を念仏して食べ物を乞い歩いた僧侶のことであるとされ、現在のエイサーの歌にシチグツチャー(7月節一継母ニンブチャー)がどこの集落のエイサーにも使われているのは、エイサーの前身が念仏踊りであることを意味する。そのことから、現在でもエイサー隊は各家庭を回り寄付や飲み物をもたらしているのは、まさに念仏踊りとの関係を一層強く感じさせるのがわかる。また、エイサーと呼ばれている語源は念仏踊りの歌の囃子「エイサー、エイサー」から来たものといわれており、そして、念仏踊りに三味線の伴奏がついたのが250年ほど前のことであるとされ、この頃からエイサーと呼ばれるようになったのであろうと言われている。また、最近においては、エイサーのタイプはこのイベントでも2とおりの型があり、一般的には前述したタイプを伝統エイサーと言い、踊りや衣装も各自の趣を取り入れ音楽も最近はやりの歌に踊りをアレンジしたタイプを創作エイサーとして区別しているようである。

このようなことから、今日においては、学校教育や社会教育にも取り入れられ、また、様々な交流の場においても披露されるなど、沖縄の民族芸能を代表するものとして県内はもとより、今や、県外においても広く親しまれている。

### エイサー用語

エイサーを踊るのには、いろいろな用語があり、それぞれ持ち分の特徴があります。今回は、それについて簡単な説明と特徴の写真を紹介し

## 地謡



うるま市平敷屋青年会(東)の地謡

エイサーの中で最も重要な役割で、地謡または地方(じかた)と呼ばれ、地域によって違いはありますが、主に造花を付けたクバ傘を深くかぶり、三線を担当する。青年会OBや、地域の先輩方から選ばれる。最近では女性の地謡も増えつつある。



## チョンダラー

または、地域によってチョーギナー、サンラーと呼ばれシュロで編んだチョンマゲかつらを被り、奇妙な化粧で滑稽踊りをする。いつもおどけてばかりに見えるが、実は踊り手達を鼓舞し、隊列を整えるという立派な役目を担う。地域によってそれぞれ仮装が違う。



シュロのチョンマゲをしたチョンダラー。



親子チョンダラー

## パーランクー



小型で片面に皮が張られている。たたいた時の音がパランという特徴的な乾いた音からきている。踊りは繊細で流麗な踊りが特徴。様々な隊形や隊列を変化させながら踊る。



## 手踊り

エイサーは本来、男性の手踊りが中心の舞だった。戦後、各地でコンクールなどで競われるようになり、女性達の手踊りが登場した。男性中心の手踊り団体の集団もいる。



男手踊り



女手踊り

## 酒かたみやー(酒担ぎ役)



チョンダラーの中には、2人1組となり大きな酒甕を担ぐ役がいる。一昔前までは、青年会の資金替わりに各家庭から酒を頂き回ったという。



## 旗頭

エイサー大会や祭りになると、エイサー集団の先頭行くのは、エイサー集団の名前入りの旗を持つ旗頭である。彼等は腰を落とすずっしりと重い旗を持ち、上下に揺らして舞う。



## 大太鼓



パーランクーエイサーや締太鼓エイサーには、音にメリハリつけるため大太鼓のパートが存在し、全体の流れを把握しているリーダー的な役割を果たす。また、全体的なムードを高める元締めでもある。

## 締太鼓



太鼓の重さで反動を付けたダイナミックな動きと、響きが魅力である。主にアップテンポの曲が多く円や列の隊形で踊る。大太鼓を組み入れずにこの太鼓のみで踊る地域もある。

以上簡単に述べましたが、これが沖縄のエイサーの基本的な組み合わせであります。これらを組み合わせながらその地域で昔からの伝統による、踊る曲や踊り方がある。また、エイサー衣装も地域の個性をだしており、観る人を楽しませてくれる。



1万人エイサー